

「ふくし」って何だろう?

「ふくし」という言葉から、頭にうかぶものは何でしょうか。 ボランティア、お年寄りのお世話でしょうか、 それとも耳の不自由な人のための手話通訳でしょうか。

どれもまちがってはいません。 しかし、「ふくし」の世界や仕事はもっと広いのです。

それではみなさんといっしょに「ふくし」について考えてみましょう。





だれもが持っている幸せになる権利

もともと「福祉 | という言葉は「幸せ | という意味です。英語では、welfareあるいは wellbeingです。wellは「こころよい」「すこやかな」という意味であり、fareは「くら す | 「やっていく |、beingは「生きる | 「人生 | という意味になります。つまり、「快適 に生きる」ということです。

「ふくし」の仕事は、人が快適に生きられるように社会的な支援をすることです。す べての人びとの「いのち」を大切にして、「くらし」を豊かにして、「いきがい」を見つ けることを支えるのです。

「ふくし」と関係の深い言葉に「人権」があります。「人権」とは、人が幸せになるこ とをさまたげられないように保障される権利のことです。ですから、「ふくし」の仕事 は「人権」を大切にするものでもあります。 COLUMN 1



世界人権宣言

2度の世界大戦の反省にもとづき、1948年12月に国際連合の第3回総会で採択された 宣言。人は生まれながらにして自由、すべての差別の禁止、法の下の平等など30条に わたって人権を宣言しました。

この宣言にもとづく人権保障に法的な拘束力を持たせるため、1966年に「国際人権規 約」が採択されています。

2014年、国連規約人権委員会が日本政府に対して6回目の審査をおこないました。日 本の人権状況は改善されたところも多いのですが、例えば、あらたな課題として、秘密 保護法、ヘイトスピーチ、原発事故による被害者の問題などが挙げられ、さらに重要事 項として、死刑、慰安婦、技能実習生、代用監獄の4テーマで改善勧告がされています。



世界人権宣言

ホームページなどで実際の宣言文や規約を読んでみるなどしてみましょう。 また、日本での批准内容や規約との相違点などについて話し合ってみましょう。

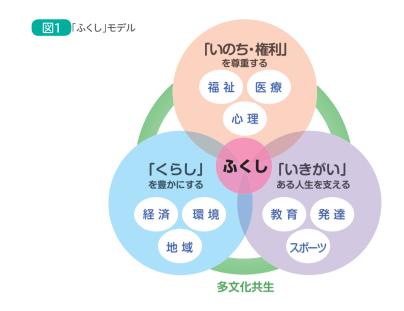


図1 は、日本福祉大学が考える「ふくし」の3つの領域を示しています。

「いのち・権利」を尊重するには、安心して安全にくらせるための福祉や医療、心理が必要です。一人ひとりのいのちを大切にし、その存在を権利として保障し、その人らしく生きていけるような支援が必要です。その人の生活を支えていくためには、医療や福祉、心理の関係者がチームを組み、包括的に支援していくことが求められています。そのためにも「多職種連携」は大切なアプローチです。

「くらし」を豊かにするためには、経済活動が基本です。みんなが豊かにくらしていけるような 経済のあり方が大事なのですが、実際には「経済的な格差」が社会問題になっています。格差社 会ともいわれます。さらには人をとりまく環境や生活の基盤としての地域のあり方も、大切な要素です。こうしたことを是正していくための経済や政治、社会全体の取り組みが大事です。

「いきがい」ある人生にしていくためには、基礎となる「生きる力」を育む教育や保育が不可欠です。人は生涯にわたって人間として発達していきます。また私たち一人ひとりが健康であること。またスポーツを通して、いきがいを育むこと。オリンピック・パラリンピックが日本で開催されることを契機に、さまざまなスポーツがもっと身近なものになるといいですね。

こうした3つの領域に重なるのが「ふくし」です。ふつうのくらしのしあわせは、私たち一人ひとりの存在を尊重するという人権の問題であり、それぞれの生き方の問題でもあります。さらには私たちのくらしの基盤となる地域や環境をよりよくしていくことが大切です。でも日本だけがよければいいのではありません。これからの日本には今まで以上に多くの外国籍の人たちと一緒に生活をしていくことになります。多文化共生や国際的な視点がとても大事になっていきます。

「ふくし」の反対語は「戦争」であるといわれます。戦争や内戦は私たちの平和なくらしを一瞬で奪っていきます。そうならないように世界中が平和でなければなりません。ユネスコは学習宣言 COLUMN 2 (p.5)をおこない、学ぶことや文化に親しむことが、生きるためになくてはならないものであると訴えました。

ユネスコ学習権宣言 ―― 学ぶことの大切さ

「学習権宣言」は、1985年3月にパリのユネスコ本部で開かれた第4回ユネスコ国際成人教育会議において採択されました。

「学習権とは、読み書きの権利であり、問いつづけ、深く考える権利であり、想像し、 創造する権利であり、…」と宣言文が続きます。

学ぶ権利は、「生き残るという問題が解決されてから生じる権利」ではなく、「未来のためにとっておかれる文化的ぜいたく品」でもありません。学ぶことによって、生活水準を向上させ、農業や工業を発展させ、健康な生活を続ける力を育てます。戦争を避けたいのなら、平和に生きること、互いの理解を深めることを学ばなければなりません。

ユネスコ学習権宣言



ホームページなどで、ユネスコ学習権宣言を探して読んでみましょう。 また、ユネスコのホームページ(https://unesco.or.jp/)にはさまざまな 活動が報告されているので、見てみましょう。

TOPIC

エッセイを書いてかよう

社会の変化や技術の進歩など、私たちの暮らす環境は日々変化しています。 その中であなたが感じたこと、疑問に思ったこと、新聞やニュースを見て考えたこと。 「わたしと福祉」というテーマで800字以内のエッセイにまとめてみましょう。

> 「高校生福祉文化賞エッセイコンテスト」 ホームページ





入賞作品集をご希望の方へ

入賞作品集をご希望の方は、下記までお申込みください。在庫のある限り頒布をいたします。上記ホームページでもご覧いただけます。



日本福祉大学 エッセイコンテスト事務局 〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目22番35号 電話 052(242)3045

2 「いのち」の尊さ

20世紀は、戦争の世紀といわれました。そして、21世紀の今日も、宗教や民族のちがい、国と国との利害が衝突して、世界各地の戦争は簡単にはおさまりそうにありません。 UNHCR 本部の発表によると、難民は7,080万人といわれています(2018年末時点)。 戦争と貧困、飢えで亡くなる人の数は想像できないくらいたくさんいます。 COLUMN 3 (p.7)

一方、世界の人口は、2000年には既に60億人を超え、21世紀半ばには97億人に達するといわれています。人口が増加するのは開発途上国が大半です。開発途上国では、たとえ戦争がなくても貧困や環境破壊、民族紛争、エイズ感染など、多くの「いのち」がおびやかされる問題をかかえています。本当の「平和」とは、戦争がないということだけでなく、地上のだれもが安心して明日を信じて生きられることです。

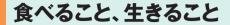
アジアで初めてノーベル経済学賞を受賞したインドのアマルティア・センは、「社会的コミットメント (約束、義務、責任を果たす)」という考え方を示しました。センの考え方をわかりやすくまとめて紹介します。

センは、人間には2種類の「自由」があるといいます。1つは自分の「ふくし」を向上させる自由です。もうひとつは、場合によっては自分の「ふくし」を犠牲にしてでも、危険にさらされている他人を救おうとしたり、社会正義のために行動する自由です。他の人たちの願いを自分の使命として進んで引き受けることも、人間として大切な「自由」だというのです。そして、これらの自由を支える条件をととのえるのが、各国の政府や国際社会の役割なのです。

[参考文献:アマルティア・セン原著、大石りら翻訳『貧困の克服 - アジア発展の鍵は何か』(集英社新書、2002)]



COLUMN



第3回高校生福祉文化賞エッセイコンテストで、鹿児島県立市来農芸高校2年、坂口彩さん(当時)の作品が選ばれました。

「あるコンビニエンスストアでアルバイトをした。そこで一つ驚いたことがある。大量入荷したおにぎり、弁当、デザート類は定刻になれば、容赦なくドカドカと捨てていくのだ」「2時間毎に捨てるものもある。これでは徹底した品質管理というより、ただの無駄遣いでしかない」「もしこれを難民の人たちに配れば何人の命が明日へ繋がるだろう。果たして『食』とはこんなに軽いものだっただろうか。肉にしろ、野菜にしろ、一つの命だったことを、私たちは忘れてしまっていないか?」というのが農業を学んでいる坂口さんからの『食べること、生きること』への真剣な呼びかけです。

2011年3月11日の東日本大震災は、津波と原発事故(天災と人災)が重なり、甚大な被害をもたらしました。多数の死者や行方不明者に加えて、家や仕事を失い、9年が経過した今でも、長年住み慣れた土地に戻れなくなっている人が数多くいます。その後も、熊本地震(2016年)、西日本豪雨災害(2018年)、令和元年房総半島台風や令和元年東日本台風による災害(2019年)などが発生しています。 **COLUMN 4** (p.8)

日本列島は、狭い国土に住宅が密集し、海に囲まれた火山帯の上にあります。これまでくりかえし、震災や風水害など自然災害と向き合い、そのたびに復旧、復興を重ねてきました。東日本大震災では、1995年1月17日の阪神淡路大震災以降の経験が生かされ、組織的なボランティア支援に加え、避難所や仮設住宅での支援のあり方にも、被災した人の立場に立った工夫がされました。原発については、廃止を中心にすえて、事故がおこらない対応の重要さが確認されました。しかし、政権が変わると、再稼動を進める方針が示され、その是否が問われています。

全国各地では、いつなんどき地震や津波があってもおかしくないという想定で、避難場所や避難経路、そして万が一の場合の相互支援の手順など、具体的に地域防災・減災を実現する動きがすすんでいます。しかし、一番大切なのは日ごろの人のつながりです。

これからの時代は、ひとりぐらしの高齢者がふえ続け、認知症の方もふえます。少子化と孤立した子育てが広がり、地域や社会で子どもを育てるという考えや気風が弱まっているといわれます。お互いの立場や事情を理解し、みんなが力を合わせながら、同じ町や村で過ごすのでないとしたら、自然災害はまるごと町や村をのみ込んでしまうでしょう。

なにはさておき、少しでも何かを送ろう、何かしたいと思った気持ちを忘れてはいけません。かの地でボランティアとして体験した、人と人との心温まる交流を風化させてはいけません。

被災地での学生ボランティア活動

2018年は災害が多発する年でした。日本福祉大学では災害ボランティアセンターが中心となり、被災地を応援する募金活動を何度も大学内で実施しました。また、7月に発生した西日本豪雨災害では、被災地のひとつである岡山県総社市の日羽地区にて支援活動を実施しました。急な呼びかけにも関わらず、14名の学生と4名の教職員が集まり、大学のバスで現地に入



りました。2日間、私たちは3つのグループに分かれて、地区内にある家の掃除やがれきを運ぶなどの作業をお手伝いさせていただきました。その中で、様々な方との出会いがありました。あるお宅のがれきをトラックに積める手伝いをしていた時、そのお宅の方が飼っているペットのお話や、被災されたときの話を聴かせてくださいました。そして、その方は帰り際に「これ持って行って!」と盆栽2つを私たちにくださったのです。それは豪雨災害の被害に遭いながらもまだ生きている盆栽でした。

泥にまみれてしまっていますが、水にのまれながらも精一杯生きた盆栽です。いただいた私たちは、命・生きるということの重みをしっかりと胸に刻み込みました。また、あるお宅で、はがした壁を土のう袋に入れる手伝いをしていたところ、その家の奥様か



ら「日本福祉大学の学生ですか?」と聞かれました。 「そうです」と答えると、「私、福祉大の卒業生なんです」と、とても嬉しそうに話してくださいました。 大学の話で盛り上がり、「ここで福祉大の後輩たちと出会えたことで元気が出ました!」と語ってくださいました。私たちの姿だけで少しでも力になることもできるのだと、勇気づけられ、現地にお住いの

方々の想いに寄り添うことの大切さを身をもって知ることができました。

災害ボランティアセンターでは、このような現地での体験を、大学のある知多半島に減災の取り組みとしていかしています。美浜町では「みんなの減災カレッジ」を大学・行政・社協の3者協働で毎年実施しています。また、武豊町では小学校や中学校の授業で防災福祉教育に取り組ませていただくと共に、学生が主体となって地域減災活動である「あそぼうさい」を開催しています。

1959年、中部地方を襲った伊勢湾台風の際、日本福祉大学は救援に立ち上がることこそ社会福祉の原点と考え、学生・教職員とともに学園創立者の鈴木修学先生も支援活動を行ったとのことです。「社会福祉は人にあり」と喝破された鈴木修学先生の教えは大学の伝統として脈々と現在に根づき、今回の災害支援活動の中でまさに実践をもって心得ることができると気づかせてくれたのではないでしょうか。





豊かな「くらし」とは何か

『パパラギ』(岡崎照男訳、学研、1981)という本があります。西サモアの小さな島に 住む酋長のツイアビは、ヨーロッパの文明社会を体験しますが、自然と調和して生きる南 の国の生活ほど豊かなものはないと実感します。パパラギとは白人のことです。ツイアビ は、パパラギが、カネやモノのとりこになって目の輝きを失い、有り余るモノを持ちなが ら、となりに不幸な人がいても平気であり、「時間を虐待」していることをなげきます。

現在、共生という言葉が広がっています。仏教の言葉では「ともいき」というようです。 「くらし」は、みんながともに豊かに、あるいは豊かな気持ちになってこそ楽しいものです。 自分の持っている物や力を少しでも社会に役立てる活動がボランティアです。それはやが て、「順ぐりのおかえし」(至文堂、現代のエスプリ『ボランタリズム』副題)となって広 がっていきます。「くらし」を楽しくするためには、まずは自分が社会の中で生かされて いる(社会参加している)という実感を持つところに出発点があるのではないでしょうか。

COLUMN 5

COLUMN 5



豊かな国は?

世界の中で豊かな国はどこだと思いますか? 国ごとの豊かさを比較する指標として 広く使われているものに、国際通貨基金(IMF)によって開発された「国内総生産(GDP)」 があります。これは一定期間の国の経済活動の成果を表すもので、これをもとに算出さ れる「一人当たり国内総生産」がその国の経済的な豊かさを示していると考えられてい ます。

これに対して、人間の豊かさは経済面だけからとらえられるものではないという考え 方で、別の指標が開発されています。例えば、経済協力開発機構(OECD) は、2011年 に「より良い暮らし指標」(Better Life Index)を発表しました。これは、幸福に不可 欠と特定している物質的な生活条件と生活の質を反映した11項目(*)で幸福度を測定す るものです。

(*) ①所得と富 ②雇用と収入 ③住宅 ④仕事と生活のバランス ⑤健康 状態 ⑥教育と技能 ⑦社会とのつながり ⑧市民参加とガバナンス ⑨環境の質 ⑩個人の安全 ⑪主観的幸福

最近では、ブータン王国が提唱する「国民総幸福」やイギリスの研究機関(NEF)が開 発した「地球幸福度」なども注目されています。

4.「いきがい」を持つこと

日本は経済的に豊かな国に数えられながらも、全国の自殺者総数は 20,840 名、中高年を中心に 1 日約 57 名もの人が自殺をしている計算となります。(平成 31 年 3 月 28 日/厚生労働省・警察庁「平成 30 年中における自殺の状況」)

テレビにうつる開発途上国の子どもの瞳は輝いているように見えます。それに比べて日本の子どもは少し疲れた暗い顔をしているように見えるかもしれません。

いま日本では、高齢者も、中高年も、子どもも、日常の生活に満足できていないのでしょうか。一番ケ瀬康子さんは、日常生活要求を以下の3つのレベルでとらえています。

- (1) 衣食住、保健衛生などの基礎的生活要求
- (2) 人間関係や職業などの社会的生活要求
- (3) 遊び、レクリエーション、趣味、学習などの文化的生活要求

(一番ヶ瀬康子『福祉文化論』有斐閣、1997)

私たちが満足できていない要求レベルは、(1)よりは(2)、(2)よりは(3)の比重が大きいように思われます。やりたいことができていないということです。自分の生活に満足できていなければどうなるでしょうか。高齢者は、自分の歩んだ人生にふさわしい生き方がしたいと思うかもしれません。中高年は仕事や生活に追われ、家族や友人と過ごす時間がなくなり、疲れ果ててしまうかもしれません。子どもは、楽しいはずの勉強や学校というイメージが持てないまま、いろいろなことがつらくなってしまうかもしれません。これらには、日本の文化のレベルが反映しているともいえます。心のゆとりが失われてしまっているのではないでしょうか。せかせかと目先の利益に向かって走っていて、走ることそのものが目的になってしまっているのではないでしょうか。

いきいきしている人たちの多くは、夢を持っています。そして、それを実現するための目標があり、人の輪(ネットワーク)を持っています。人とのつながりは、趣味であったり、スポーツであったり、芸術であったりします。文明より文化、物質より精神の豊かさが、「いきがい」として求められているのです。 \bigcirc (OLIUM) \bigcirc (p.11)

「いきがい」があるから、「いのち」が輝きを増し、「くらし」の質が高まるのです。すべての人が快適に生きられるまちづくり、物づくり、そして社会の仕組みをつくること。すべての人びとの「いのち」を大切にし「くらし」を豊かにする、「いきがい」を見つけることを支える、それらのすべてが「ふくし」なのです。

さあ、あなたはこれから「ふくし」について何を学びますか……。

COLUMN 6



ダウン症の書家 金澤翔子さんの活躍

障害という言葉について、かつては個人の「障害」という意味あいで使われていました。 心身に何らかの働きの不具合があり、十分に能力が発揮できなくて、それが社会的な不 利(ハンディキャップ)になるという考え方です。

現在では、「障害」を周囲との関係でとらえる考え方に変化しました。人は、心身の 一部の働きが悪いとしても、時と場合によっては大きな力を発揮できます。周りが差別 しないで、その個人の活動や社会参加を大切にして、持ち味をうまく発揮できる条件が 整うならば、「障害」と「健常」の区別は必要がなくなります。

日本福祉大学客員准教授の金澤翔子さんは、書家として世界的に活躍されています。 2012年、NHK大河ドラマ「平清盛」を揮毫(きごう) されたことでも有名です。

同じく書家で本学客員教授の金澤泰子さんは、「ダウン症」の娘を持つ母親として、様々 な苦悩にぶつかりながらも、これまで翔子さんと共に歩んでこられたそうです。泰子さ んは、翔子さんの書が人々を感動させる理由について、「純粋な魂と優しさを持ち、世 俗への欲望を全く持たない生き方をしている翔子によって書かれた書だからです」と話 します。

翔子さん個人の「障害」という点に着目すれば「ダウン症」。しかし、その独創的で人 の心を動かす「書」に着目すれば、個性豊かなすばらしい才能をもつ書家です。翔子さ んは、30歳を機に念願の一人暮らしを始め、社会、世界とつながりいきいきとした生 活を送っています。



この作品は、日本福祉大 学スポーツ科学部棟内エ ントランスに飾られてい ます。







2019年9月14日 日本福祉大学セミナー(福岡会場)での講演と揮毫